

University Academic Repository

震災復興プロジェクトにおける実践共同体の役割に
関する一考察：
相馬農業高等学校の挑戦を事例として

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-10-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 酒部, 美希 メールアドレス: 所属:
URL	https://kaetsu.repo.nii.ac.jp/records/982

DISCUSSION PAPER SERIES

震災復興プロジェクトにおける
実践共同体の役割に関する一考察
—相馬農業高等学校の挑戦を事例として—
酒部美希

No. 2022-6

(2022 年 5 月)

RESEARCH INSTITUTE
OF
MANAGEMENT AND ECONOMICS

KAETSU UNIVERSITY

震災復興プロジェクトにおける実践共同体の役割に関する一考察
ー相馬農業高等学校の挑戦を事例としてー
酒部 美希*

要旨：

東日本大震災で深刻な被害を受けた地域では、復興に向けての様々な取り組みが行われてきた。福島県立相馬農業高等学校では、2013年に「農業再生」を目指すシンボリックなプロジェクトとして「世界最大のシードアート製作委員会」を立ち上げ、相馬野馬追の騎馬武者絵を描いたアートを作成、ギネス世界記録に認定された。本稿では、東日本大震災で深刻な被害を受けた地域で、その復興のために地元高校生が取り組んだプロジェクトを事例として、実践共同体に着目して考察を行うものである。本事例から言えることは、「共感できる挑戦的テーマ」を見出すことが実践共同体の形成や人材の参集に、その挑戦的テーマに対する「共感力」が実践共同体の活動動力に深く関わっているということである。

キーワード：震災復興、実践共同体、高校生、ギネス世界記録、意識改革

* 所属：嘉悦大学経営経済学部非常勤講師、連絡先：mikitaro@kaetsu.ac.jp

1 はじめに

1.1 研究背景

2008年に日本の人口はピークを迎え、現在は一部地域を除き全国的に人口減少が進んでいる。特に長期にわたって地方での人口減少が進行していることから、これまでも様々な地域活性化への取り組みが行われており、それらの活動に関する研究も様々な角度から進められている。例えば、古川(2019)は事業主体に着目し、大学生主体の地域活性化プロジェクトの有効性を示し、その活動が有効に機能するための条件を論じている。古田(2019)は失敗要因に着目し、過疎地型芸術祭が地域づくりにつながらなかった例を取り上げ、その原因として地域資源の活用不足や地域コミュニティの主体性を生かせていないことを指摘している。また、豊島・黒瀧(2019)は地域資源の活用に着目し、廃校の潜在的な地域的価値を取り上げ、その立地優位性を生かした事例をもとに廃校を地域活性化プラットフォームとして活用できる可能性に言及している。

このように、地域活性化に対する研究関心は様々だが、地域活性化に取り組むのは人であり、かつ複数の人間が協力・協働することによって成立している。地域における実践共同体に着目したのが石山(2014)である。実践共同体とは、「あるテーマに関する関心や問題、熱意などを共有し、その分野の知識や技能を、持続的な相互交流を通じて深めていく人々の集団」(Wenger, Mcdermott & Snyder, 2002, p.33)と定義される。これまでの実践共同体の先行研究は、主に企業内外における知識創造との関連が注目されてきた。この概念を地域社会に導入し、実践共同体が人的ネットワークの結節点となり、地域における学習と知識共有を促進する可能性があることを示唆したのが松本(2013)である。これを受けて、石山(2014)は地域活性化に関する実践共同体の複数の事例をもとに、以下のような類型化を試みている。

- (1) 大学など、教育機関と地域が連携して実践共同体を生成する事例
- (2) 地域における横断的な人材育成のために実践共同体が生成される事例
- (3) 地域活性化にむけ内発的に実践共同体が生成される事例
- (4) 外部団体と地域が協働する方式での実践共同体の生成の事例

表 1 地域における実践共同体の4類型

類型	担い手	実践共同体の効果
1. 教育機関と地域の連携	・研究者 ・学生 ・地域住民	・担い手(特に学生)のアイデンティティ形成(参加をとおして) ・地域における知識創造
2. 地域における横断的な人材育成	・地域の行政 ・地域の企業 ・育成対象の人材	・その地域に必要とされる技能の人材の養成 ・地域内の穏やかなつながりの形成
3. 地域の内発的な実践共同体	・地域の行政 ・地域の企業 ・地域のキーパーソン	・新たなビジネスモデルの形成 ・移住を含めた人材の集積

	・外部からの支援者 ・地域住民	
4. 外部団体と地域の協働	・外部のキーパーソン ・外部の一部参加者 ・地域住民	・外部（よそ者）と地域住民の穏やかなつながりの形成 ・外部と地域の共同体の融合

出所) 石山 (2014) P.67.

本稿では、福島県立相馬農業高等学校における震災復興の取り組みを事例として取り上げる。2013 年、相馬農業高校の生徒が中心となって「農業再生」をめざしたプロジェクトを立ち上げ、大豆・黒豆を使って相馬野馬追の騎馬武者を描いたアート作成に挑戦し、ギネス世界記録に認定されたが、このプロジェクトは中心メンバーの生徒たちの将来にも影響を与えることになった。本稿では実践共同体に着目し、先行研究を踏まえて考察を行うものである。

1.2 南相馬市の概要

相馬農業高校のある南相馬市は、2006 年 1 月 1 日、旧小高町、旧鹿島町、旧原町市の 1 市 2 町が合併して誕生した市である。福島県北東部にあり、いわき市と宮城県仙台市のほぼ中間で太平洋に面している。事故を起こした福島第一原子力発電所から北に 10～40km の位置にある（図 1）。市域は南北約 25km、東西約 15km、面積は 398.6 km²で、人口は 63,653 人(2014 年 10 月 1 日現在)。旧自治体の相馬郡小高町・相馬郡鹿島町・原町市をもとに、小高区・鹿島区・原町区の 3 区で構成されている。

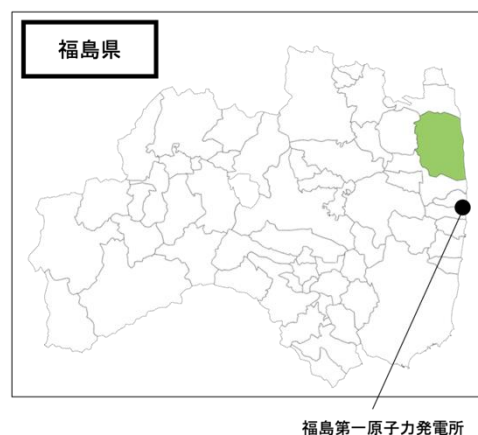


図 1 南相馬市

南相馬市は、2011 年に発生した東日本大震災により最大震度 6 弱の地震および最大波 9.3m の津波、そして福島第一原子力発電所事故によって甚大な被害を受けた。死者・行方不明者は 600 名を超えた。最も南にある小高区を中心に原発から 20km 圏内は全域に避難指示が出され（一部を除き 2016 年解除）、ピーク時には 30,000 人以上が市外に避難した。また原発事故に伴う放射性物質拡散の影響により、飲料水や農地は広く汚染された。

震災当時、7万1千人だった人口は5万4千人に減少（2022年4月時点）、医療機関は半数以下（同）、小中学校の生徒数も半減（同）している。また、第二次産業（製造品出荷額）は震災前の水準を超えているが、基幹産業の1つである農業は、津波で被災した農地が2,722haに及ぶなど、震災直後は壊滅的な状況にあった。原発事故による水稲作付制限(30km圏内)を受け、震災があった年は市内全域で作付制限が実施され、水稲の作付けが再開されたのは3年後からであった。また、8年後の2021年度までに復旧した農地は7割弱の1,823haにとどまっており、水稲生産者数も震災前年の3,063戸から467戸（同）に激減している。

2. 相馬農業高校生によるギネス記録挑戦

本節では、実践共同体の生成過程や共同体メンバーの果たした役割に着目しながら、プロジェクトの実施過程を概観する。

2.1 端緒

このプロジェクトは、2013年12月、福島県内で復興支援活動を行っている59の世界記録-FUKUSHIMA PRIDE-の運営をしていた著者が、南相馬市のNPO法人みんな共和国を訪問したことに端を発している。59の世界記録-FUKUSHIMA PRIDE-は、福島県内59市町村を対象に「福島の誇り」をテーマにしたギネス世界記録への挑戦を支援するプロジェクトであり、みんな共和国は、震災以降の南相馬市において、子どもの居場所や子育て支援活動を行う団体である。

お互いの活動内容を話し合う中で、震災からの復興を支援する取り組みの1つとして、南相馬市においてギネス世界記録挑戦ができないかという話題になった。後日、みんな共和国のメンバーで相馬農業高校のOBを通じて母校にその話が伝わり、高校内で生徒を含めた議論を経て、グループで挑戦したいとの申し出が、みんな共和国になされた。みんな共和国と著者が支援を表明し、高校生有志を主体とした学校公認のプロジェクトとして取り組むことが決まったのである。

2.2 実践共同体（世界最大のシードアート製作委員会）の体制

プロジェクト着想当初に関わりのあった相馬農業高校の生徒、同高校の教員、みんな共和国及び著者によって「世界最大のシードアート製作委員会（以下「製作委員会」と言う）」という名称の実践共同体が組織された。プロジェクト推進の主役は相馬農業高校の生徒であり、教員やみんな共和国メンバーは生徒たちのサポート、59の世界記録はギネス世界記録に関する専門的サポートを行うという役割分担がなされた。具体的には、生徒たちが「豆を使った世界最大のアート」の製作を担当し、教員やみんな共和国メンバーは進行管理・資材購入・会場確保など、著者は、ギネス記録の認定を行っているギネスワールドレコーズとの連絡、交渉、調整役を担うことになった。

2.3 実施過程

まず今回の挑戦に当たって、製作委員会によって目標設定が行われた。当時の南相馬市は原発事故の影響でコメの作付制限が行われ、農業再生は重要な課題であった。また県外・海外からの福島県産の農産物に対する風評被害が大きく、地域住民は心身ともに疲弊していた。そこで、以下の目標を立ててプロジェクトを展開することとされた。

(1) 農業復興のシンボルとなる

基幹産業の1つである農業に関連した記録に挑戦することで、南相馬の農業復興のシンボリックな取り組みとする。

(2) 地域の伝統文化を活かす

1,000年以上の歴史がある伝統神事「相馬野馬追」をテーマに記録に挑戦することで、地域の伝統文化を再認識する機会とする。

(3) 地域の将来に向けた人材育成を図る

高校生が主体的に世界記録に挑む経験を積む貴重な機会とする。

まず製作委員会で検討が行われ、議論が南相馬市の「農業復興」のイメージにふさわしい農作物の種を使用する記録を調査することになった。様々な記録の中から、種の色の違いを生かして相馬野馬追の騎馬武者を描く「植物の種を使った世界最大のアート（Largest seed mosaic）」に挑戦することが決まった。

その後、必要書類を揃えてギネスワールドレコーズに申請、首尾よく審査を通過した。後日、「ガイドライン」と呼ばれる記録挑戦のルール書類が送られてきた。しかし、提示されたルールに従うと、当初予定した計画では、既存の記録を超えるための種の購入金額が、想定予算を大幅に超えてしまうことが判明した。協賛金等により必要資金を集めることも検討されたが、多額であるため全てを賄うことは難しいと判断された。そのため、ギネスワールドレコーズと、挑戦する記録内容の変更についての協議が行われた。ギネスワールドレコーズから、1粒のサイズが大きい《豆》を用いる「豆を使った世界最大のアート（Largest bean mosaic）」の提案があったことから、製作委員会で検討の結果、それに沿って挑戦内容についての変更が行われることになった。

当時、ギネスワールドレコーズの日本支部がまだ設立前だったため、ロンドンの本部から届いたガイドライン等の資料は全て英語であった。そこで、まずはガイドラインを日本語に翻訳し、ルールを把握する作業を行う必要があった。ガイドラインには守るべきルールが細かく記載されており、例えば『アートに使用した豆の個数を報告しなければならない』『サイズは、2人の独立した測量士によって計測されなければならない』などである。また、これらのルールを守って挑戦したことを証明するために、挑戦の様子を撮影した写真・動画、さらに証人による証明書等を提出する必要がある。

ルールを確認した上で、豆で描く「相馬野馬追の騎馬武者」の基本デザインを、みんな共和国のデザイナーが作成した。そのデザインを拡大する形で正方形のダンボール 300 枚(15×20)に書き写された。その上で、ダンボールに描いたラインに沿って両面テープを貼り、それを大豆部分と黒豆部分の境目とした。学生たちは土日を使ってアート作成の準備を進めると同時に、不足分の資金を調達するために地元商店街に対し協賛金・寄付金の依頼を行なった。当初は活動の認知度も低かったため、なかなか協力が得られず苦労をしたが、活動の様子が地元テレビ局の情報番組や新聞などで紹介され始めると徐々に変化が起こった。地元住民から応援され始めると、店舗に募金箱を設置させてもらえるようになり、協賛金・寄付金も集まるようになった。

3ヶ月かけた準備が終わり、アートを完成させるため市内にある小川町体育館を3日間貸し切っ

た。挑戦日には地元テレビ局も取材に訪れるなど関心も高まっていた（図 2）。1 日目は、協力して体育館に大豆・黒豆約 2 トン（図 3）を搬入し、床に事前に準備したダンボール 300 枚を広げる（図 4）。アート制作と並行して、協賛企業名等を会場内に紹介する準備も、併せて進められた（図 5）。



図 2 挑戦する高校生等のメンバー



図 3 搬入された大豆・黒豆



図 4 ダンボールで作成された図面



図 5 協賛企業の紹介準備

2 日目から、本格的にアート制作を開始。バケツを使用して次々と大豆・黒豆が流し込まれ（図 6）、隙間ができないよう丁寧に敷き詰められた（図 7）。順調に思えたが、事前の計算より黒豆が不足することが判明する。メンバーが急遽黒豆を在庫にもつ業者を探したが、週末のためほとんどが休業していた。運よく 60km 以上離れた二本松市の業者に在庫があることがわかり、みんな共和国メンバーが調達に向かったが、調達したものを加えても黒豆が不足したため、急遽一部デザイン変更の作業が急きょ行われた。



図 6 大豆の図面への流し込み



図 7 大豆の敷き詰め

3 日目は、事前に学生たちがチラシ配りをした成果もあり、多くの地元住民も参加（図 8）し、背中に九曜紋の旗指物をし、刀を振り上げた騎馬武者の絵が完成した（図 9）。



図 8 家族連れも多く参加



図 9 完成した騎馬武者

完成したアートは、測量士 2 名によりサイズを計測され、挑戦イベントは終了が終了した。後日、挑戦時に撮影した写真・動画等の証拠資料をチェックし、ギネスワールドレコーズに送付された。その後、ギネスワールドレコーズでの審査の結果、ギネス世界記録として認定され、後日、実践共同体メンバー立会いのもと、相馬農業高校で全校生徒を集めて認定セレモニーが行われた。そこで、ギネス世界記録挑戦の様子が紹介されギネスワールドレコーズ（図 10）、学生代表に認定証が手渡された（図 11）。



図 10 相馬農業高校での認定セレモニー



図 11 学生代表と認定証

2.4 成果

相馬農業高校の挑戦の様子は、10 件以上のメディアに取り上げられた。福島民報・福島民友などの地元紙、福島中央テレビ・テレビユー福島などの地元テレビ局にとどまらず、朝日新聞・TBS などによって全国に紹介された。その反響は大きく、生徒たちには多くの地元住民から祝福の声が寄せられ、彼らにとっては地域の役に立てたことが大きな自信になった。特に代表と副代表の 2 人は、東京農業大学への進学契機ともなった。大学入学時には「大学を卒業したら南相馬に戻って農業再生の役に立ちたい」と話していた彼らだが、卒業後は 2 人とも実際に南相馬に戻り、1 名は母校の相馬農業高校の教員となり人材育成に、もう 1 名は南相馬市役所に勤務し地域課題の解決に取り組んでいる（2022 年 3 月末）。また、他のメンバーも実家の農業を継ぐなど、今回の挑戦が南相馬の復興や農業再生に携わる人材の育成にも繋がることになった。

3. 考察

3.1 実践共同体の形成

地域活性化における実践共同体形成の端緒は様々であるが、本事例の特徴の 1 つは、地域外の組織関係者との「偶然の出会い」がプロジェクトの端緒になったことである。著者が南相馬市の NPO 法人みんな共和国を訪れ、そこでギネス世界記録挑戦の話題が初めて共有された。また、みんな共和国関係者に相馬農業高校の O B がいたことも偶然である。そして、その O B が相馬農業高校に情報を提供することによって、生徒を主体とした世界記録への挑戦という基本方針が決まったのである。つまり、外部からもたらされた情報の伝達経路に沿って、目的を共有する実践共同体が自然発生的に形成されたのである。換言すれば、地域外からもたらされた情報に地元関係者が価値を見出し、反応した結果とも言える。

3.2 テーマの設定

「何をやるか」については、実践共同体の形成に伴って段階的に具体化されている。まず、世界

記録への挑戦という抽象的な目標が共有され、次に3つの基本目標が掲げられ、実践共同体の体制が最終的に固まった段階で、「植物の種を使った世界最大のアート」という具体的テーマの設定に至っている。

指摘すべきことは、テーマに関する情報、ノウハウを持つ人材の存在である。事例では、著者がギネス世界記録に関する必要な情報を提供し、南相馬市の地域事情に見合ったテーマ設定へのガイド役を果たしている。

ギネス世界記録挑戦はこれまでも各地で行われてきたが、失敗するケースは少なくない。例えば、2019年に愛知県犬山市が挑戦した「同時に生卵を割った最多人数」では、当日、必要な参加者(2,800人以上)が集まらなかったため失敗に終わっている。つまり、多くの地域住民の理解、協力を得るためには、住民の「共感」を呼ぶテーマを設定することが重要になる。テーマへの共感、実践共同体関係者の情熱や意欲にも大きな影響を与えるものである。

本事例で言えば、震災の被害によって農業は壊滅的な打撃を受け、物心両面で疲弊していた状況から、復興に向けた歩みを進めるための取り組みが求められていた。また、また「相馬野馬追」は地域の伝統神事であり、家族や知人が参加していることも多い。設定したテーマが地域に密着していたことが、実践共同体関係者の熱意につながり、多くの住民の協力にもつながったと言える。

また、具体的な挑戦内容も成否を分ける重要な要素になっている。挑戦の難易度は記録の内容によって成功確率が大きく異なる。例えば、2015年に福島県いわき市が挑戦した「最も大きな腕組み乾杯」は、参加者全員で腕を組んだまま乾杯を行うという、一見容易に思われる挑戦であった。1,000人以上の参加を募り、時間・労力・資金を費やした挑戦だったが、挑戦中に組んでいた腕を離していた参加者がいたことがわかったため失敗に終わった。多くの参加者が必要であり、かつ一人でも失敗すれば記録挑戦そのものが失敗となる、難易度の高い記録を選んだことが原因であった。

一方、本事例では、時間・労力をかければ認定される可能性の高い記録として「植物の種を使った世界最大のアート (Largest seed mosaic)」が選ばれている。この記録は作品が完成しするまで期限を設けずに時間をかけることができ、記録認定が見込める段階になって審査を行ってもらうため、失敗するリスクが低いと判断されたからだ。この種の判断にはギネス世界記録の実際をよく知る人材の協力が不可欠である。後日、予算不足から挑戦する内容を変更する必要が生じたが、その際にも著者が窓口になってギネスワールドレコーズと交渉し、挑戦する記録を「豆を使った世界最大のアート (Largest bean mosaic)」に変更することにより、実現に至っている。

3.3 役割分担と協働

本事例における実践共同体内の役割は、記録挑戦者が生徒、プロジェクトの進行管理がみんな共和国、地域内支援者が相馬高校の教員、地域外支援者が著者に大別されるが、メンバーには記録挑戦に対する意欲、認識の共有と、それぞれが果たすべき役割をよく理解していたと言える。加えて、プロジェクトを成功させるために必要な人材が集まっていたこと、その場その場で求められる行動を、実践共同体関係者が手分けして行う体制が実現していたことが挙げられる。

例えば、みんな共和国のデザイナーが「相馬野馬追の騎馬武者」のデザインを担当し、記録挑戦中に生じた黒豆の不足を補うための調達や、その後のデザイン変更も、実践共同体関係者の臨機応

変な対応によって行われている。

また、プロジェクトを推進するリーダーシップも重要である。例えば、2018年に福島県平田村が挑戦した記録「世界最多品種のあじさい」における平田村の澤村和明村長、2019年に福島県田村市が挑戦した記録「世界最大のテーブルアート」における坪井健寿郎氏などは、リスクを踏まえた上で、強い情熱と意志を持ってリーダーシップを発揮し、挑戦を成功させている。本事例においても、みんな共和国の竹内容堂氏が黒子役となり、臨機応変な指示を関係者に出している。実践共同体として、関係者がそれぞれの果たすべき役割を理解し、目標達成に向けた活動が展開されていたことがわかる。

3.4 資金調達の担い手

ギネス世界記録に挑戦するためには、ギネスワールドレコーズへの申請料や挑戦に必要な資材調達、会場費などの経費がかかることから、資金調達を行う必要がある。自治体や商工団体、青年会議所のように一定の予算が確保できる組織は別だが、多くの場合は関係者が自ら資金を調達、工面する必要がある。必要な資金が調達できず世界記録挑戦を見送ったケースも少なからずある。本事例における主な費用は、記録挑戦の申請料、大豆・ダンボール・両面テープ等の資材購入費、会場となった小川町体育館の利用料などだが、必要な資金は福島県の補助金および地元商店等からの協賛金でまかなっている。

補助金申請については、ノウハウを持つみんな共和国と著者が行ったが、注目すべきは、協賛金集めは生徒たちが行う手法が採用されたことである。前述のとおり、先行研究でも実践共同体の相互学習機能が指摘されているが、プロジェクトの目標の1つが「地域の将来に向けた人材育成」であったことから、協賛金集めを、生徒の社会教育の機会として活かすやり方が取られたのである。協賛金集めは、当初は上手く行かなかったが、地元に着目した挑戦テーマであったこと、生徒たちの熱意が次第に伝わっていったことから、必要な資金を集めることができた。これは、生徒たちにとっては日常の高校生活では得がたい貴重な経験になったと言える。

3.5 広報

特に多数の参加者を前提とする記録への挑戦の場合は、認知度を高めるために様々な手段を使って地域住民に周知することが不可欠になる。周知方法としては、地元メディアによる報道やSNS等での情報発信、また自治体との連携が可能であれば、全戸に配布される広報誌に掲載してもらう方法もある。特に効果が認められるのが地元メディアによる報道である。テレビや新聞報道によって記録挑戦の認知度、信頼度が高まり、参加者の募集や資金調達もより効果的に行うことができることになる。本事例では、みんな共和国と著者が地元メディアに準備状況等の情報を提供し、福島民友新聞に掲載された。また学生たちが協賛依頼と同時にチラシを地元商店に配布し、併せてスーパーや複合施設などでもチラシ配りを行うことにより、当日までには多くの地域住民が本事例の挑戦を知ることとなった。

3.6 効果

本事例の世界記録挑戦は、その年の最高の記録をファン投票で選出する「Fan Choice Record of the Year 2014」では日本初のファイナリスト（4位）として選出されるなど、製作委員会が当初掲げた(1) 農業復興のシンボルとなる、(2) 地域の伝統文化を活かす、(3) 地域の将来に向けた人材育成を図る、という目標は達成されたと認められる。

指摘しておくべきことは、教育的観点からの効果の持続性である。相馬農業高校の正面玄関には、「相農復興の原点」として認定証と当時の新聞記事が展示されており、在校生や教員に「本学の誇り」として受け継がれている。

また、世界記録挑戦という成功体験は、生徒たちの将来にも影響を与えることになった。東京農業大学への推薦は、これまでは相馬農業高校以外の県内高校から計2名が推薦されていた。しかし、その年はプロジェクト成功が評価され、相馬農業高校から代表と副代表が推薦され進学したのである。入学時には「大学を卒業したら、南相馬の農業再生のために役に立ちたい」と話していた2人は、前述のとおり、学生代表は南相馬市役所の職員として地域課題の解決に、副代表は母校である相馬農業高校で教員として人材育成に当たっている。また、他のメンバーも実家の農業を継ぐなど、プロジェクトへの挑戦は、生徒たちにとっては自らの将来にもつながるエポック・メイキングな出来事だったのである。

4. おわりに

本事例は、地域外からの情報提供を端緒として、地域内での情報伝達経路に沿う形で実践共同体が形成された事例であり、石山の4類型から言えば、(1) 教育機関と地域が連携、(3) 地域の内発的な実践共同体、(4) 外部団体と地域の協働、の混合型と言える。このことは、地域活性化には多種多様なテーマがあり、テーマによって担い手も実践共同体の役割、効果も異なることを示すものである。

また、本事例は「共感できる挑戦的テーマ」を見出すことが実践共同体の自然発生的な形成と人材の参集につながり、その挑戦的テーマに対する「共感力」が実践共同体の原動力となることを示している。この観点から言えば、「世界一を目指す」という目標が地域事情に見合ったものであれば、地域における人的資源の活性化や、実効力ある実践共同体形成のための有効な手法の1つとなり得ることを示すものである。

[1] 石山恒貴「地域活性化における実践共同体の役割ーNPO2 法人による地域の間づくりに向けた取り組み事例ー」『地域イノベーション』法政大学地域研究センターVol.16、P.63-P.75

[2] 犬山市 HP「リトルワールドでギネス世界記録に挑戦」

<https://www.city.inuyama.aichi.jp/photonews/1006300/1006305.html>（2022年4月21日）

[3] 小川地域振興協議会 Facebook「ギネス世界記録 町おこしニッポン「最も大きな腕組み乾杯」 in 小川」

<https://www.facebook.com/watch/?v=1692112051022202>（2022年4月21日）

[4] ギネス世界記録 HP「私たちのストーリー」

<https://www.guinnessworldrecords.jp/about-us/our-story>（2022年4月21日）

- [5] 59 の世界記録 - FUKUSHIMA PRIDE -HP 「5th 世界最多品種のアジサイ」
<https://www.59-world-records.org/5th-most-varieties-of-hydrangea> (2022 年 4 月 21 日)
- [6] 59 の世界記録 - FUKUSHIMA PRIDE -HP 「6th 世界最大のテープアート」
<https://www.59-world-records.org/6th-largest-tape-mosaic> (2022 年 4 月 21 日)
- [7] 59 の世界記録 - FUKUSHIMA PRIDE -HP 「Fan Choice Record of the Year 特設ページ」
<https://www.59-world-records.org/fan-choice> (2022 年 4 月 21 日)
- [8] 相馬野馬追公式サイト「相馬野馬追について」
<https://soma-nomaoi.jp/about/> (2022 年 4 月 21 日)
- [9] 谷村要(2021)「アニメ聖地における「キャラ縁」の形成」『地域活性研究』Vol.14, p.85-p.94
- [10] 豊島まゆみ、黒瀧秀久(2019)「廃校の潜在的地域の価値を活かした地域活性化に関する研究- 都市交流施設・道の駅保田小学校を事例として -」『地域活性研究』Vol.10, p.97-p.106
- [11] 古川尚幸(2019)「地域と大学が連携した地域づくりー香川大学直島地域活性化プロジェクトを事例としてー」『地域活性研究』Vol.10, p.127-p.134
- [12] 松本雄一(2013)「実践共同体における学習と熟達化」『日本労働研究雑誌』No.639, p.15-p.26
- [13] 南相馬市 HP「南相馬市について」
<https://www.city.minamisoma.lg.jp/portal/admin/minamisomashinitsuite/index.html> (2022 年 4 月 21 日)
- [14] 南相馬市 HP「南相馬市災害記録誌」
https://www.city.minamisoma.lg.jp/portal/admin/koho_kocho/1/6/4411.html (2022 年 4 月 21 日)
- [15] 南相馬市 HP「会議資料 2_被害状況 2011_0701-4.doc」
<https://www.city.minamisoma.lg.jp/material/files/group/7/01-05shiryou2.pdf> (2022 年 4 月 21 日)
- [16] 吉田隆之(2019)「過疎地型芸術祭が地域づくりにつながらない要因の多角的考察ー奥能登国際芸術祭を事例にー」『地域活性研究』Vol.11, p.41-p.50
- [17] Wenger, E., McDermott, R. & Snyder, W.M. (2002) *Cultivating communities of practice*. Boston: Harvard Business School Press. (野村恭彦監修(2002)『コミュニティ・オブ・プラクティス ナレッジ社会の新たな知識の実践』翔泳社)